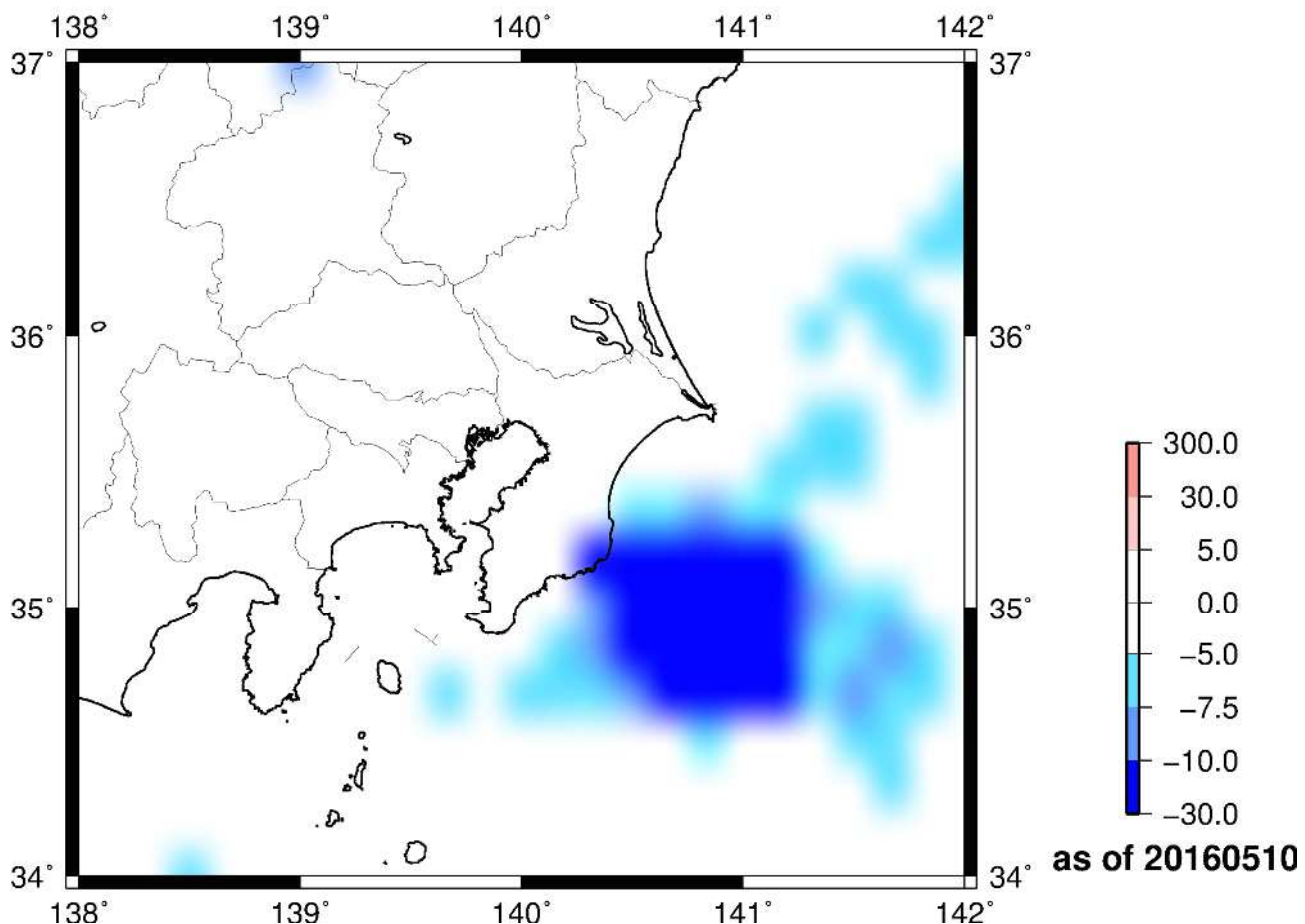


**首都圏広域の解析**

ここしばらく九州の地震活動を中心に上げてきましたが、首都圏の監視も忘れることはできません。ある意味、首都圏直下型の地震は日本のみならず、世界の経済にも大きな影響を与える地震です。

首都圏は世界でも極めて稀な、複雑なプレート境界に位置しています。東側からは太平洋プレートが沈み込み、さらに南側からはフィリピン海プレートが沈み込んでいます。東京は厚い堆積層の下にフィリピン海プレートがあり、さらにその下に太平洋プレートが存在するという構造になっています。

今回の解析では5月10日時点の地下天気図®をお見せします。房総半島沖合に地震活動静穏化領域（青い領域）が広がっています。

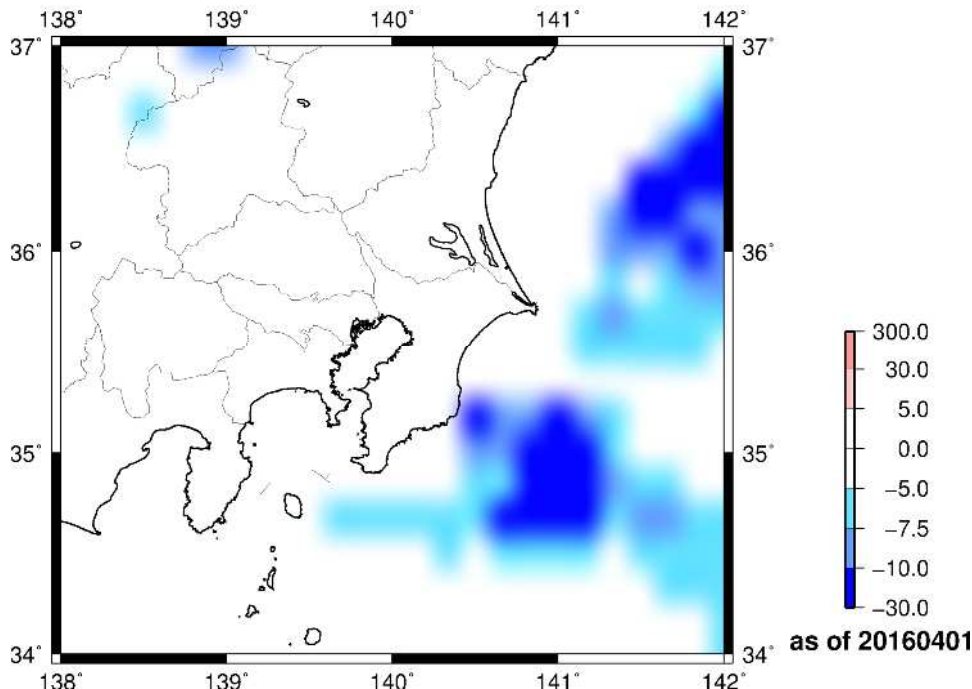


この異常領域の時間変化を見ますと、どうも東日本大震災を引き起こした太平洋プレートの沈み込みが関係しているように見えます。

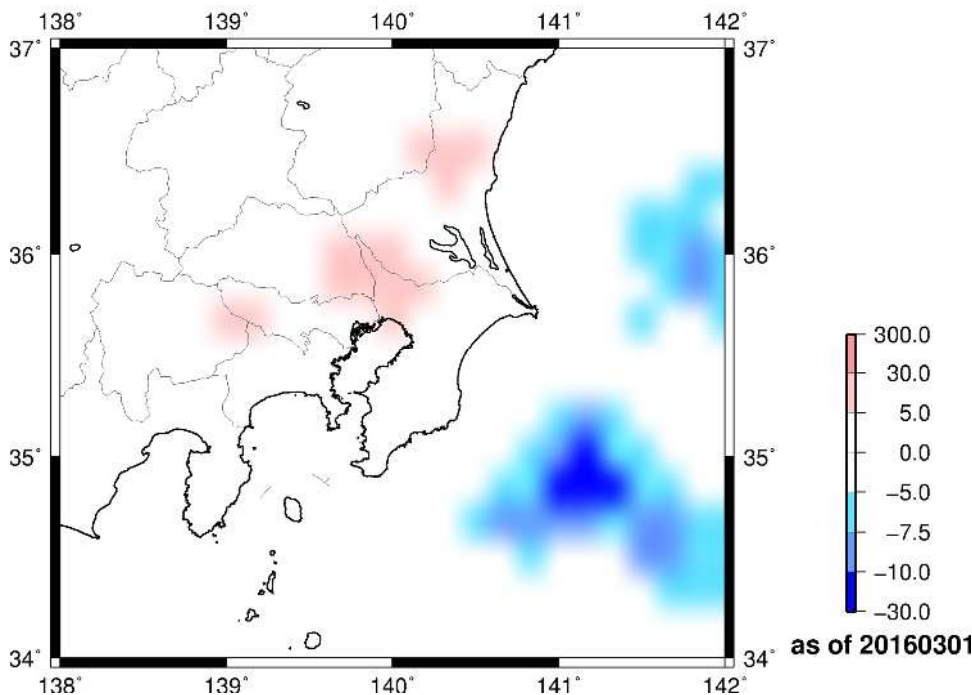
房総半島沖では、**M6.5 前後の地震が繰り返し発生**しています。一番最近では1987年のM6.7というのがあります。この地震は『千葉県東方沖地震』と名付けられています。その前には1950年にM6.3、1912年にM6.2が発生しています。上記3個の間隔は、38年および37年でしたが、今回のニュースレターでは触れませんが、この地域では**体に感じないスロースリップ**と呼ばれる地震（スロー地震とかサイレントアースクェークと呼ばれる事もあります）が5-6年に一度発



生しています。房総沖でこのスロースリップが6回発生すると被害の出るM6.5クラスの地震が発生するようにも見えます。すでに前回の1987年の地震から30年近くが経過し、このスロースリップも6回発生しています。東日本大震災が発生した事により、それまでより歪の蓄積速度が大きくなり、房総半島沖の地震はいつ発生してもおかしくない状況になったと考えています。



4月1日の時点での静穏化の分布。この時期は茨城沖でも短期間の静穏化が見て取れる



3月1日の時点での静穏化の分布

2月の段階では房総沖の静穏化はほとんどみえない事も判明